古今著聞集

十三

文和記
號 8 9
册 20册内
文庫

古今著聞集巻第十三

説話 第二十

流俗之習舟楫随事皆成徒説雖為浮詞
依其機浪多有会者矣

延応元年十二月廿二日内裏出火之中文殿被
焼了清涼殿ならびに新主殿被
焼了内侍所ならびに中宮のほねつぼ楽
器を出し出だせる中よりの道の女房の清和院の自
かれる事ありし年の漢詩あり故小野宰相
をけるめづらしく感ずるものなり

兼平宮年三月廿六日天子常寧殿にて東宮后の
御年賀の賀をとりかはせ給ふ廿七日後宴に或人に歌を
いとゝ多り給ふ御酒はじめ給ふ
右大臣保忠大納言藤原
時平右衛門督藤原
定国三度ずつ給ふ
康和宮年二月九日内裏の試楽あり
右大臣
左大臣
樂屋へ
この日小笛物具を樂屋へ
遣はす
右大弁
配
右大弁
右大弁
右大臣
右大臣
右大臣

[illegible]

次に拾遺中大弁[illegible]

[illegible]

次に拾遺中大弁[illegible]

[illegible]

[illegible]
次紀義利童事[illegible]
[illegible]
[illegible]退宿[illegible]の[illegible]
仁平二年正月十日[illegible]
[illegible]日[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

出雲のまつをつく所へ向ひて右大臣と成て西面に
八箇をかれ中央に大将迦に同く左大臣より
向く鶴敷をかれ陸奥郡ト宴会酒盛を酒
かれ右大臣孫代人を率して左大臣へ向ひ
頃代より左大臣笙歌笛琴篳篥郡ト舞楽
奏し人光時卿の梅沼にて師仲郡ト
童舞歌酒を奏せられ曲れとして退さる次に左大臣
のうたうにめされく宇白髪はあとあるてまつ歌
をり扇をうけく童て退さる次に右大臣童歌技
拍しめく右の肩めはを衣をうけたまはれ笛をおく

而後代の南北朝の時にいたりて亟と乖離なり事務
はなはだ多くして後右大臣神の亟にして乖離
し給ひしを後世のひとく出授ありて大臣者生
国の官拘子既多筆義大納言兼雅公卿伝大納言公雅
資賢卿ト和琴伊実卿ト付琴亟多義卿舞楽
長律の亟早勅奏ありしなり
建長元年十二月十八日長の孫宣成宿禰七
十賀ハ世ノ亟ニ例あるとや院の御製を下
七十年はなほのあまとや祈りこそ
年ノ為の教と定ゆきなん

為大納言為家卿の撰とはしりてさぶらふ

弥山の西世にうつる西海林りて

はてれる其もうつる為とて

哀傷 第二十一

西暦八年九月廿九日延喜聖主崩御十月十一月

醍醐寺の山陵よりうつりまゐり出家御書三

巻に思清苦一会琴を旅筆 [illegible] 和琴

中文弘厳[illegible]

みけんせり[illegible]

はかなくて入[illegible]

義方和琴とうつる雅楽和琴毎治良久琴をうつる雅

これ平調よりうつべくうつる和琴とべ律調あそうつべき

[illegible]今八去[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

朝夕歎心后後前立常習

と唱へくるるなりとぞ小児は文をまなぶとおもふら
あるまじきなり村人さうとあるにおどろきも
やまるぞとつねれば人のうづけ指つる文を
そんじていひける

郭公はあけくれなきとれなん
をとれさるれつひにそ

七歳の人れくんぶとれたるもあで人まはねば
あれも指宿なりやたにしそ
信長流入道後とれ葬送の歌山伏おなく

万人駿動れずのをり所虎殿おどろき給て西堂
をもの西堂後八ちとしさぐせあで人ぐふうと
さを給くるあくれ海あぞと作れなり牧先
さてかくれどくの勢軍とびとぞ廃ぐまり
をるあくれ旅中ようちを海とあびとぶ中
ふみこけさんのはかくいひ手せてくんぐりをるそ
いみぐく笑くれ

後中書生雑仕とかれせちせあひくさ虫の交
白をびまうけ給くるく船のそ船中ふをとくわ
ひしを給ぞ泥あるうかるる月れわうをる泥仲の

雜仕とぞ〜のそて遍服するへあり〜まし〜うせるに
の雜仕物ふそ〜〜れてうせふくり中世をあげさ
ふの〜〜後理あそ〜〜るふあまりて日はあり〜
まて〜〜〜

せのうぬより一貞安とあるを人代記かゝるを宣
陰明院のうゝ[illegible]くかをるにそわれ知るゝ
名羽代代年紀字[illegible]てさゝ[illegible]代年紀あるてさゝ
ひまいしせられをり
仁平元年九月七日兼光卿宣旨を被奉
密仏法師らたちおてやせいゝ[illegible]ぞそおとえ衣よ
をう海をて三蓮院のぐれ[illegible]とかゝ[illegible]宣旨平
生にをう和の義いたとゝ[illegible]ばえ実鹿王丸[illegible]
とえくハを[illegible]のぶ[illegible]すゝことばといひをり[illegible]漢
文ふ長ゝてよくに義礼智信とをりをり[illegible]後生

れをゝ[illegible]ゝてゝ[illegible]ゝをゝ[illegible]
しゝびゝさゝゝ[illegible]十月廿九日字[illegible]のおとゝ成佐が
弟ゝどゝ[illegible]支配して一月ゝ三度[illegible]の像を[illegible]
ゝ法花経を[illegible]字して[illegible]佐が[illegible]ゝゝ
仏事せゝれをり[illegible]ゝ成佐が[illegible]ゝ
久寿元年の[illegible]法おとゝれ句[illegible]有ゝ[illegible]成佐
思道ゝ[illegible]ゝ人代害するゝ[illegible]
いをり[illegible]
名羽代ゝれを[illegible]ゝ法華道の歌[illegible]法師思
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

うみ行くる

あまをぶねこそ行のひさしくなれあさうれ
者うちうれある身なり寄り

四条の御うみ行けける

うちうらみ海みるさへ恋しきあまのひが
くもりれひとつくるたつけても

海をうりれ人こゝ海うれどもひとり海みてあるこゝ
海墓うそとふひまのつせく

ちうやしとひうてそなりけるは

昔ありうれ多なりうは

二条院くまうせ申病云寛平院自内宮に参り
て兄まのつせうるに故院ふあうあ海く仰せの
ありをれバあうれ見くに次日前右兵衛佐光に
のりせへやをうり申

みしまの江れ川のうきさをつきき
なれしまの江れ井もひあうれく

高倉院の女房世をいとひくうるうる人行うり義
行のくて院うくまうせ給ふうい大病云寛平院の
女房のりへうつり申

月新城みをくへ入しあとうりい

雲のうへなるいとゝそはしき

冷泉院大宮文治元年二月廿日年廿二にてうせ給
て後三七日の歌後京極殿の三位中将にて申し
きるに法華経の五部の経とかゝりて加せ給ひ
ける百余枚の紙に書給ひ

雲月羽林悲二月秋一

とぞ侍る年生の出風情よりかゝるをれは悲涙
とのぶひく古顔の詩につゝせ給ける中に

再會爰中秋徒事
遺文詩上識二哀悲一

後ふさとそおぼゆ

中宮権大夫家房卿建久七年七月七日にうせ給て
後の哀後京極殿のいとなみて年生の他
文の席に法華経の一部を書給ひ年四会あり独吟せ
給ひ

花尚哀
宅弱田宅慶安人

西行法師義経の釈迦堂に入滅の日法華経
をよみ給ひ

ひてよみ給ける

ねはのはるのあくまをもとめん

その二月ばかりの月のころ

むくうみくつのふ建久九年二月十六日ふ洲を成し
ぎくぐりぶる紙ゆのくた近ゆ和宣郎称菩提
院三位中将のりもとへかつらつ作る

りち月の時ひくうちぬ雲をもれく
うくきん雲のあり来り新しか

ゆ

むくさ紀の雲とうくあてなくさる
うくきんそくうの新しきれる

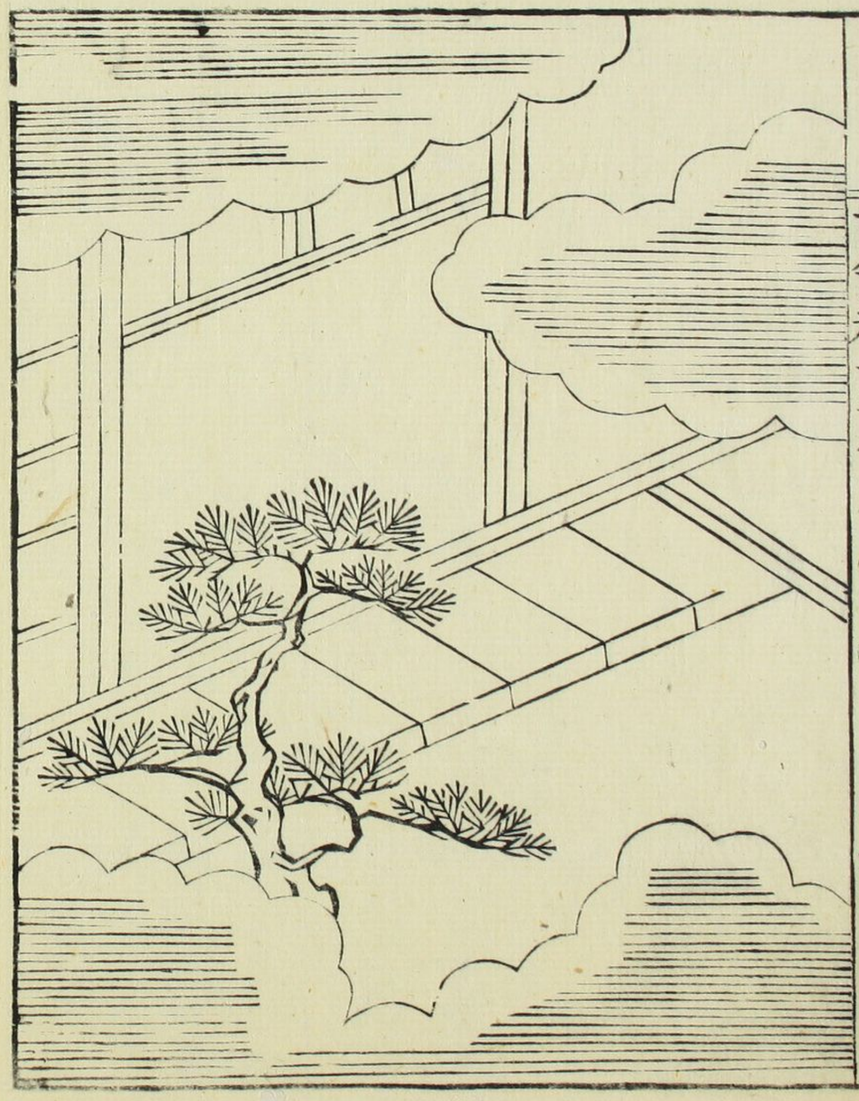
後京極殿八幡宮社道ふ長じ元弘寛治
の黄九紙紙弱く建永元年三月ふ雨殺義ゆて出
水寒を移りんと新ぶ一うちをうくへ宇礼濁濱を
位者の松を引うくへ宮ぐてうあぐよ位てうあ
り熊野山実上のうあへまをれば三百廻て中の己
を用うをうる例もあてと十二百さざあ紙の海狂よ
七月の秋俗よ失さ世落ふをうくへ礼秀句むの新く
むゆのふりてうて作つめ位年ふ八こ行く長
紀半へ宣家ひる月をあげうて家盛に礼りゆへ
ドつうう新を

ひるまうてくけとゆのうう様九

一条院御時の山風

ふかくこのさとやまの春かすみ
たれかはらふ山風

[illegible]の前内大臣の申こしの時三十首の歌人
[illegible]て撰定してつかはる時[illegible]
と思しめしてあるて寄水懸花[illegible]
[illegible]
[illegible]巳の字は[illegible]
[illegible]



せくあるもうつゝぬ涙のこれはけ
うき秋くるこゝのまそくるれ
兼久の乱ふりて中山中納言宗親卿へ
よびくだされるに菊河とのゝ西あてうり
ぐさうきて捧女の家れ捧小書付給る
菅南陽源義水汲下流る延冷
今東海道菊川於西宿に失命
今あるる勇猛の武士海ふ原ふ
つれいのちさまこゝあいる
さうの事に知あんで兼つ稀まるあれ

ふいみづき年くそれ書付ありをろ拾ハしびくの
燒亡そ成大すふ元おゝ寄ぐらくありをる火
り屋けふる
法を羽院くれ走拾て写千九百の巻等仰り
聖覚法下条こうをれ仏ゆ度をうさ和て
あこおをりて為ふ成書ふ人すみうりて七条
院の正さまあて臨時の正仏すあ民ぐくゆん
せあてといひて刻彫ほうがしありをれバ聖覚礼
鑑ふのぼりく恒例の仏経さんをて御三に生
ての別と天下に為れバ置山の雪遥ふ為てを

死ての雪成堀下にりをもむまバ霜清の水物明や
ふ信れ拾るふりをてぬ親ぬ、あしあくるあ上男
れ寄ふ拾ハ我をあふを人れ為ふを呉ハ白井
をいひくくる成打こりをるあ人ぬ行よあ為て
ぞ清ふ絲こりを為生ての別を和よ為れバ置山
れ寄を為て清ふ為ハ清清の雪れれす
をくるを元を成てくるを成ふ拾ふ年くふ清ふ遥れは
遥ふ為ふをれつをくる成ふを
浪二位家隆ハハりくらり清母のつをあ為りを
清ふ為嶺二年十二月廿二日百首ふおくをしく出

第七十九のかくなるを取りて天王寺へ詣で
武人の数ありて俗の法花の平家を語りて供
なるく今は世にたえぬる宮八日宿執や儀式を
ん七夕の和歌を語られる
ちきりはれをあたるさんにやりて
俗の八日はおりみつるか
なるみのうらに波寄せてあるもしまに
をしくもあるかな法花の四巻八
二なくあるのひちりひをみ不乃
ちきりのたれうをもうるる

八十あまりあるあるの和歌結ハ
ミ法ていきてへ教世のちりひよ
うたりのをきを部屋をを出ぬも
雑俗のうたあるうを海ーうそ
あみ法ていとしてをりなハ
れもうて人をちひうきれん
くうちうちはうまを海人あうを義
あるはるあ和歌一不立家
くて背ふくをを和歌を知く国別に端居合掌
して地に垂にそりなを号をを歩垂せぐりきり只

今生身は仏番遠き落りんどれば年号のよりそ
いとれうそいてできはひくらとれもしろなくこの世
ら重ねり親の又身四りてつきの年服ぬぎ出て後
いせにとりて伊勢いくなくて母又身まうしらば
いそ死の後りく伊勢物語のふくらう
あちこりやちれ家やこりくん
はてしてあ後とりて
いくりありしくみふちたん
人のれあ一いせのあるさ
生者必滅はとり今者宝離のあひとりたも

てこのの後半まばいたくおどろくさた
あく孫たちくまのあくりあ一かりしへ宝塔の法
ゆく西新てこたいつら彫くてはみあを生ぐひなくま
らせ申しまりこたに法三年四月六日俄ふ古不録の
半ゆこ七月長舎に法ものなり前大僧正良尊
法印房能信歳をし心肝をくでこたくれ形をしの
どもをまりしこ医ふ二社の年御帳寄殺さられて
れしこたと小益なり申寅刻より出業　刻に十二
あくくゆこさせ法ありすたこ人成とるに人あ一ゆた
半く十九日法へ指ふあ日御葬送中十六日をさ

まつ〳〵ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

神のよ不法生の面はてれ屋して
けとこ〜の〜花や高〜さ

山高ゆえ法に組へく拙く毒〜しに毒年の
九月の文法の法うせはせおりかり高〜醍醐寺
の法華に参ふまちり作〜よりの供下りて返すこひ
作〜八人よりかせくつうり作〜
ゆひ屋れ法生の面をられゆして

又きれを姫秋の山里
義山法は財中秋云義懐八ゆ藏格在中弁惟藏
八を居ゆてとのく天下の格のとられり塩ゆ法門

ひそ入間裏と出せおく思ふ惟ゆす机いら
りとゆを切く義懐はおいひうへ八を表ゆ藏と
しを折りおりつうにゆ人と姫くとを文形を色ゆ法
うん弁八ゆ弟ゆ折ゆ義懐家もを色をなり
きうけうりやいひく間しく思してぞう義州よて志
折を色びいうぐを色の人ゆひうに姫懐人をうきう
立秋々り殺室ゆすして面れる

天一人を生れのくゆく山里
山形くをきて法言う郎
相を殺法門世代天印法法を色法ゆ社ゆうひと巻ゆ

[illegible]法師の御のれもまめ弘徽殿の女御として
[illegible]ふるゝ世なりさほうがのごとくゆんざーやうに世をさる
ふとられ世なりくはあげさ濃うらび世中んがなく
[illegible]ゝれ命りさる比叡山寺白いまぐさ日上人
世て聖人弁ゝ[illegible]ゝ海がのあざふ

畜生孫寶及主従

陸命流時不隨者

[illegible]の文殊書てりられ命りさる比法華せるまゝさる
まりてそいとぐ世心ちられ比それば世の毎のしみ八義
[illegible]法ーの狂ゝり國主の位うーなりゝ思食

[illegible]りてゝ命ちまゝ地獄十王の王位ゝ[illegible]一[illegible]の
乃ふ入ゝ世法ふゝりまでに地裏をかさ世法ふる
[illegible]寛和二年六月廿日なる
[illegible]りをれば[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
天世ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の月ゝりをれば
我形ゝ[illegible]ゝ海ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
どりゝ世法ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
られゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
世ゝ世法ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

法皇氏ぬすみありて後ゝ月のうちに西三位中納
言まうでよるゝれば世もうにはかりまゝたゞうち
きけるとぞ世の人ゝかやをる天徳元年五月四日
源のあつしいへどもる経あくうせ給ふ世あ七百四
白とぞ申しける

浅草文庫

古今著聞集巻之十三終

7